目次

一　はじめに

二　文・文節・単語

文……一三
文節……一三
単語……一四
言・辞……一五
単語の分類……一五

三　文節の続き方と種類

文節の続き方……一七
連文節……一七
文節の種類……一八
主語・述語……一八
連用語……二〇
接続語……二〇
連体語……二一
並立語……二二
独立語……二二

四　体言・副詞・接続詞・連体詞・感動詞

体言……二四
副詞……二七
接続詞……二九
連体詞……三〇
感動詞……三〇

五　用言

動詞……三二
アイウエ式活用……三三
ナ行変格活用……三三
ラ行変格活用……三四
イ・イル式活用……三五
イ・ウ・ウル式活用……三六
エ・ウ・ウル式活用……三七
エ・エル式活用……三八
カ行変格活用……三九

サ行変格活用……四〇
活用形の用法……四〇
形容詞……四二
活用形の用法……四四
形容動詞……四六
活用形の用法……四七
六　助動詞
(一)　使役
す・さす……四九
しむ……五〇
(二)　受身・可能・自発・尊敬
る・らる……五二
ゆ・らゆ……五四
(三)　希望
たし……五五
まほし……五六
まうき……五七
(四)　打消
ず……五八
(五)　断定
なり……六三
たり……六五
(六)　回想
き……六六
けり……六九
(七)　完了
つ・ぬ……七二
たり……七五
り……七六
(八)　推量
む……七七
むず……八〇
らむ……八一
けむ……八六
まし……八八
らし……九一
べし……九三
べらなり……九五
めり……九六
じ……九八
まじ……一〇〇

(九)　伝聞・推定
なり……一〇二
(十)　たとえ
ごとし……一〇五
ごとくなり……一〇六
(十一)　継続
ふ……一〇七
七　助詞
(一)　格助詞
の……一〇九
が……一一三
つ……一一五
を……一一七
に……一一九
へ……一二〇
と……一二一
より……一二一
から……一二一
にて……一二三
(二)　並立助詞
と……一二三
(三)　接続助詞
ば……一二四
とも……一二七
ど・ども……一二八
を……一二九
に……一三一
が……一三一
ものの……一三二
ものを……一三三
ものゆゑ……一三三
ものから……一三四
て……一三四
して……一三六
つつ……一三七
で……一三八
ながら……一三九
(四)　副助詞
は……一四〇
も……一四一
ぞ……一四二
なむ……一四三

や……一四四
か……一四六
こそ……一四七
すら……一四九
だに……一四九
さへ……一五〇
し……一五一
しも……一五一
のみ……一五二
ばかり……一五二
まで……一五三
など……一五四
(五) 終助詞
ぞ……一五四
や……一五五
か……一五六
な……一五六
な…そ……一五七
ばや……一五八
なむ……一五八
がな……一五九
かな……一六〇
かし……一六一
や……一六一
よ……一六二
な……一六二
も……一六二
は……一六二
を……一六三
な……一六四
ね……一六四
八 敬譲の言い方
(一) 丁寧
はべり……一六六
さぶらふ……一六七
給ふ……一六八
(二) 尊敬
る・らる……一六九
たまふ……一七〇
たぶ……一七一
たまはす……一七一
おはす……一七二
おはします……一七二

おはさうず……一七三
います……一七三
ます……一七三
いまそかり……一七四
をす……一七四
のたまふ……一七四
のたまはす……一七五
す……一七五
めす……一七六
おぼす・おぼしめす……一七六
きこす・きこしめす……一七六
しろしめす……一七七
まゐる……一七七
たてまつる……一七八
(三) 謙譲
たばる・たまはる……一七九
たまふ・たぶ……一七九
まつる……一八〇
たてまつる……一八〇
つかうまつる……一八一
たてまつれ……一八一
申す……一八一
まゐる……一八二
まゐらす……一八三
まかる……一八三
聞ゆ……一八四
聞えさす……一八五
さぶらふ……一八五
(四) 両方を高めて待遇する言い方……一八六
九 注意すべき文節……一八六
主語……一八九
連体語……一九一
並立語……一九六
直接話法式と間接話法式……一九八
接続語……二〇三
はさみこみ……二〇四
結びの文節……二〇八
一〇 枕詞・序詞・かけことば
枕詞・序詞……二一〇
かけことば……二一二

一一　倒置・省略
倒置……二一四
省略……二一五
一二　文の種類
感動文……二一七
希望文……二一九
疑問文……二二一
平叙文……二二四
動詞活用表……二二八
形容詞活用表……二三〇
形容動詞活用表……二三一
助動詞活用表……二三二
助動詞の活用型……二三四
助動詞の接続表……二三六
助詞の接続表……二三七
敬譲の動詞・助動詞一覧……二三八
主な敬譲の助動詞の活用表……二四〇
事項索引……二四一
古典語索引……二四五

一　はじめに

現代語の文法を学ぶと、ことばに一定のきまりのあることがはっきり自覚され、日常の言語生活に対しても、今までの安易な態度が一変して、より正しく、より効果的にことばを使うにはどうしたらよいかなどという一つの目標が得られる。ところが、古典語の文法を学ぶのは、文章を上手に書いたり、昔のことばをうまく話すというためではなくて、古典を正しく読み、正しく理解するためであるといえる。われわれに遺された古典を通して、古人の精神に触れ、祖先の感情に参入するためには古典が正しく読解できなければならない。

それでは、古典の読解ということを目標とする文法では、どういうところに重点をおいたらよいのであろうか。

従来の参考書の中には、古文を品詞に分類するのが、文法の最大の仕事のようにしているのがある。しかし、文を読むという上では、品詞分解はできなくても、その意味がはっきりとれる方が望ましいことである。「徒然草」のはじめにある、

つれづれなるままに

の「つれづれ」は名詞か、「つれづれなる」で形容動詞か、「まま」の品詞は何だろうなどと、問題にすることがある。これをはっきりすることは、ことばの学問としては必要なわけであるが、それができなければ意味がわからないというものではない。また、それができたら、どれだけ解釈が深くなる、というようにも考えられないのである。本書でも、品詞の分類はその手順がはっきりわかるように体系的に説明はしてあるが、実際の文について、それを分けるとなると、始末に困るようなものや異論のあるものがある。そういうものを諸説ならべたてて論じてみることはさほど重要なこととも思われない。品詞分解の知識はいらないというわけではないが、品詞を

(2) 連用語となる。
人のもとにわざときよげに書きてやりつる文の、（枕草子　すさまじきもの）
人のところにわざわざきれいに書いてやった手紙の。

(三) 連体形
(1) 連体語となる。
月の明らかなる夜。
(2) 「ぞ」「なむ」「や」「か」の結び
月ぞ明らかなる。
(3) 体言に準じられることがある。
月明らかなるそよき。
(四) 已然形……「こそ」の結び
月こそ明らかなれ。
(五) 命令形……命令形は例がほとんどない。

○語　幹
ナリ活用の語幹に「の」を伴なって連体語となる。
かりそめの御しつらひをしたり。（源氏物語　帚木）
間に合わせの御設備がしてある。
わざとの御学問はさるものにて、（同　桐壺）
表立っての御学問はいうにも及ばず。

六　助動詞

助動詞は辞のうち活用のあるものである。主に用言に伴なわれて文節をなし、それを伴なう語とともに、全体として一つの用言に準ずる用法をもつ。その活用も、動詞か、形容詞か、形容動詞か、に似ているのが普通で、特殊な活用をするのがいくつかある。（付表「助動詞の活用型」参照）以下助動詞を意味で分けて考えてゆくが、この意味をしっかりと把握しなければならない。

使役の助動詞

す・さす

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
す	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	さす	さする	さすれ	させよ

意味用法
(1) 人にさせる意をそえる。
(2) 「たまふ」とともに用いられて「せ給ふ」「させ給ふ」全体で尊敬の意をあらわすことがある。（一七〇頁参照）
(3) 平安時代にはじめて現われた。